

## 探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：坂中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
坂小学校	14	336
横浜小学校	15	322
小屋浦小学校	7	71
坂中学校	13	377

(令和4年11月1日現在)

### 1 指導上の課題

探究的な学習の在り方に関する研究推進地域の昨年度の取組を振り返り、指導上の課題として、次の3点があげられる。

○昨年度、研究推進協議会を中心に、坂中学校区として系統的に育成を目指す資質・能力をまとめ、児童生徒の発達段階に応じた具体的に目指す姿について整理した。今年度は、総合的な学習の時間と各教科等との関連を明らかにし、総合的な学習の時間を通してどのような資質・能力を育成するのかについて、各学年の各単元を精査して整理する必要がある。

○昨年度は、まず教師・児童生徒ともにタブレットを使ってみることに力点を置き、ICTが教育活動の日常的なツールとなるように取り組んだ。その成果もあり、「学校で、ほぼ毎日タブレットを使っている」の項目で肯定的に回答した生徒（中学校3年生）の割合は大幅に増加した。一方で、ICTの特性や強みを生かした個別最適な学びや協働的な学びの充実に向けた具体的な活用については、課題が残った。

○探究的に学びを進めていくためには、教師から問いが与えられるのではなく、児童生徒自らが問いをもつことが重要である。そのために、教師は学習対象との関わり方や出合わせ方などを工夫する必要があり、課題の設定の場において、「ずれ」や「隔たり」、対象への「憧れ」を感じさせるような手立てを一層行う必要がある。

### 2 研究の概要

#### (1) 研究テーマ及び研究のねらい

○研究テーマ

主体的に学ぶ児童生徒の育成～生活科・総合的な学習の時間におけるICTを効果的に活用した授業づくりを通して～

○研究のねらい

昨年度、坂中学校区では系統的に育成を目指す資質・能力を明らかにし、そのゴール姿をイメージしながら、生活科・総合的な学習の時間を中心として、児童生徒にとって必然性のある課題の解決に向かう探究的な学習の在り方について、中学校区全体で取り組んできた。今年度は、昨年度の取組を継承しながら、ICTを探究の道具としてより効果的に活用し、探究的な学習の過程を充実させ、主体的に学ぶ児童生徒を育成することをねらいとする。また、「本物の探究」として、探究的な学習の一層の充実が求められている状況から、「学習過程を探究的にすること」と「他者と協働して主体的に取り組む学習活動にすること」のさらなる充実に向けた方向性についても明らかにしていく。

#### (2) 総合的な学習の時間における育成すべき資質・能力

昨年度、研究推進協議会を中心に、坂中学校区で育成を目指す資質・能力を設定するとともに、児童生徒の発達段階を4つに分

け、その具体的な目指す姿について整理した。

今年度は、総合的な学習の時間と各教科等の相互の関わりを意識しながら、学校全体で育てたい資質・能力に対応したカリキュラム・マネジメントが行われるように、総合的な学習の時間を通してどのような資質・能力を育成するのかを明らかにして単元を開発することに取り組んだ。坂中学校3年生の単元「お互いの命をまもり合おう」では、表1のように、学校の教育活動全体を通して身に付ける資質・能力について、総合的な学習の時間が果たす役割を意識しながら、育成すべき資質・能力を具体的に表した。

表1

単元「お互いの命をまもり合おう」における育成を目指す資質・能力の具体的姿	
【チャレンジする力】	・ふるさと坂について自分たちが知っていることや経験したこと、新たに学習したこととのズレを通して、自らが解決したい課題をもち、解決に向けて果敢に挑戦している。
【挑戦】	・課題解決に向け主体的に取り組む中、実行錯誤しながらあきらめず取り組んでいる。
【粘り強さ】	
【解決力】	
【表現する力】	・ふるさと坂の防災について自分で考えたこと、グループで考えたことを、目的や相手、場面に応じて、内容や方法、表現の仕方などを工夫しながら伝えることができる。
【自己】	
【目的・相手・場面】	
【工夫】	・コロナ禍だからこそICTの価値に気づき、ICTを効果的に活用して、自分たちの考えや思いを表現することができる。
【協力・貢献する力】	・学校や家庭、地域の中での役割を自覚し、皆と協力して、ふるさと坂の課題を解決するために行動している。
【役割】	
【行動力】	・ふるさと坂の防災のために、地域の一員として、また中学生として、どのようなことができるのかを考え、行動している。
【感謝】	

#### (3) 取組について

##### 【探究的な学習の充実に向けた取組】(本物の探究を目指して)

##### ①小中研究協議会を柱とした研究授業

研究推進協議会の中に、研究推進リーダーを中心とする各小中学校の研究主任を構成員としたプロジェクトチームをつくり、生活科・総合的な学習の時間の単元開発を行った。各小中学校で、研究授業を行うこととし、その学習指導案検討を通して、やるべきことや目指すべきことについて協議した。学習指導案検討を柱にしたことで、研究主任のイメージ化が図られ、各学校の授業改善の方向性が定まった。

##### ②ICTの効果的な活用

##### ○時間と空間を超えた新たな学び

ICTの時間的・空間的制約を超えること、双方向性を有すること、カスタマイズが容易であることなどの特徴を生かし、これまでの教育活動において実施が困難だった活動や、時間がかかっていた活動を単元の中に積極的に取り入れた。

##### ○「個の学び」と「集団の学び」の往還

多様な他者と協働的に学ぶことで、多様な情報に触れるとともに、異なる視点や異なる考え方を通して、学習の質が高まる。その際、自分自身の考えや思いを持っておくことで、他者との共通点や相違点が明確になる。「個の学び」と「集団の学び」を有機的につなげる役割として、ICTを効果的に活用することとした。

##### ③地域に開かれた単元構成

##### ○「答えのない問い」「社会へ還元する問い」を扱う学習

探究的な学習とは、「答え(ひとつの解)のない問い」に向き合い、考え続けていくことであるといえる。すでにある答えを理解したり記憶したりするのではなく、答えを自分が決めていくことで、子供たちはこれからの社会で必要となる資質・能力を伸ばしていく。そのため、PBLを参考に、「答えのない問い」「社会へ還元する問い」を扱うような単元を構成した。

##### ○外部人材(外部機関)の活用

子供同士では解決できないことも、地域の人や専門家の方との交流を通じて、これまでの学びを手掛かりに探究的に学びを深めていくことができる。また、地域の人や専門家の方との交流は、子供の社会参画の意識を喚起することができる。外部人材(外部機関)を積極的に効果的に活用し、生徒こと

って充実した活動となるようにした。

④学びの蓄積・学びの見える化

○学びのストーリーを紡ぐ掲示物の作成

探究的な学びのストーリーは教師から与えられるものではなく、教師と児童生徒とともに創り上げていくものである。単元のゴールに向け、現在自己の学びほどの位置なのか、これまでどのような学びを積み上げてきたのか、今後どのような活動が必要なのかについて、その意識を持ち続けることは重要である。そのため、学びのストーリーを紡ぐ掲示物を学年掲示板に貼り、探究の過程を教師と児童生徒が共有できるようにした。



3 実践事例

上述の(3)の取組の具体例として、中学校区のゴールである坂中学校第3学年「お互いの命をまもり合おう」の単元において実践事例を示す。なお、本単元の探究の流れは、図2に示すように、探究活動Ⅰから探究活動Ⅲまでがスパイラルに高まっていくような構成となっている。

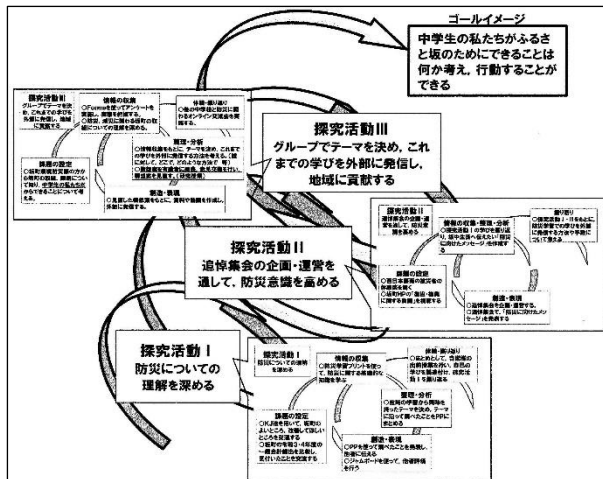


図2

<ICTの効果的な活用>

単元全体を通して、ICTを積極的に活用した。インターネットを使って多様な情報を収集することももちろん、表現活動では、文書作成ソフトや表計算ソフトを使って調べたことをまとめたり、プレゼンテーション作成ソフトを使って、全体の場で発表したりする活動を行った。探究活動Ⅱでは、オンラインによる追悼集会を実施した。集会の中で下級生に向けて発信した「防災に向けたメッセージ」も各学級がICTを活用して作成した。防災意識を高める紙芝居をつくり、それを実演している様子を撮影・編集し動画にまとめた学級や、探究活動Ⅰでの学びをプレゼンテーションソフトを使ってまとめた学級など、各学級が創意工夫してICTを効果的に活用していた。また、探究活動Ⅲでは、坂町の実態を把握するため、Googleのアンケート作成ツールを使って調査を実施した。校区内小学校児童に調査をお願いする依頼動画も、タブレットを用いて生徒が作成した。



<地域に開かれた単元構成>

生徒自らが主体的に「答えのない問い」をもつことができるよ

うに、学習対象との関わり方や出合わせ方を工夫した。探究活動Ⅰでは、これまでの生徒の考えとの「ずれ」や「隔たり」を感じさせるため、坂町の令和3・4年度の一般会計歳出を比較させ、気付いたことを交流させる活動を仕組んだ。その中で、災害復旧費の削減率が最も高いこと、令和4年度の災害復旧費は令和元年度の予算の5%であることを知り、驚きとともに予算が少なくなる中で、「自分たちができることは何だろう」という想いや意欲を引き出すことができた。

探究活動Ⅲでは、これまでの学びを外部に発信し、地域に貢献する活動に取り組んだ。その中で、整理・分析の学習過程を充実させるため、各グループが考えた構想案をゲストティーチャー(以下、GTとする)に向けて発表、交流し、構想案を修正・改善する機会を設定した。総合担当の教師が、GTと綿密に事前連携を行い、専門家としての想いをしっかり受け止めた上で、生徒に語りかけもらう内容について検討を行った。その成果もあり、授業ではGTの話をもとに学びを深めていた。グループによってはGTから伝えられた内容以上のことについて、仲間と協議し、よりよい発信の方法について検討することができていた。



<学びの蓄積・学びの見える化>

探究活動Ⅰで実施したプレゼンテーションソフトを使った発表会では、ジャムボードを活用して他者評価を行った。各グループの発表後、発表を聞いた生徒はジャムボードに、事前示してあった評価基準こそって、評価とその理由を記述した。ICTを使って学びや評価を可視化することで、即座に自己の取組をフィードバックすることができ、自己の振り返りやまとめの質が高まった。

4 研究の成果と課題等

(1) 成果

成果については、大きく2点挙げられる。

1点目は、小学校と中学校が連携して、PBLの考え方を参考に「本物の探究」に向けた単元を開発できたことである。指導主事を招いての研究推進協議会での指導案検討も、探究的な学びを各学校で具体化する上で大きな役割を果たした。また、総合的な学習の時間と各教科等との関連を意識して、総合的な学習の時間で育成すべき資質・能力を整理することができた。

2点目は、ICTを効果的に活用し、探究的な学びを充実させることができたことである。昨年度に比べて、活用したソフト・機能が増えたことに加えて、その具体的な活用方法についてももしっかり検討した上で、ICT活用の特性・強みを生かして使用できた。総合的な学習の時間におけるICT活用について研鑽を積むことで、各教科の授業においてもICTの有効的な活用が広がっている。

(2) 課題

課題は、中学校区として系統的に育成を目指す資質・能力に基づいた生活科・総合的な学習の時間のルーブリックと、それに基づいた評価の在り方についての研究である。今年度の各学校の研究協議会では、行動観察と振り返りシートをもとに、児童生徒がルーブリックに照らしてどの評価にあたるのかについて、参加者で協議した。その活動を通して、評価にばらつきがあるといったルーブリック評価の難しさを感じるとともに、指導と評価を一体化させるために、精緻で具体的なルーブリックの作成が求められていることを再確認することができた。